日本語動詞形の習得順序
－使用依拠アプローチ（usage-based approach）の観点から－

高梨　美穂

要旨

本稿では、日本語の動詞形を母語話者はどのような順序で習得するのか、使用依拠アプローチ（Langacker 1988, 2000, Tomasello 1999, 2003）の観点から解明を試みた。岩立（1981）は、日本語の動詞の語形習得を、「くっつき仮説」という一定の習得順序によって一般化しているが、問題があるとも指摘している。よって、この仮説の妥当性を再検証するとともに、仮説の問題点：（ⅰ）動詞によって語形の習得順序が異なる（ⅱ）仮説に矛盾するデータが存在する、について検証した。研究資料には、一男児の 1 才から 3 才 6 ヶ月の発話データを用い、主に「行く」「来る」の 2 つの動詞を分析対象とした。

その結果、岩立（1981）の仮説が支持されたとともに、次の点が新たに確認された。

（1）動詞の語形習得にはある一定の順序が見られる。

（2）動詞の語形の習得には、一般的認知能力とともに社会的認知能力が関係している。

（3）語結合の前に、動詞がスロット、接辞が軸となるピボットスキーマが形成される。

キーワード：動詞形，行く・来る，使用依拠アプローチ，頻度，伝達意図，ピボットスキーマ

１．はじめに

日本語の動詞には接辞を複数付加することができるため、文中での働きや次にくる形式によって語形が大きく変化する。「行く」を例にあげると、終止形 [iku]、否定形 [ikanai]、マス形 [ikimasu]、命令形 [ike]、条件形 [ikeba]、意志形 [ikou]など、活用によって語形が変化する。また、語幹の [ik] に、使役、受身、否定、終助詞などの複数の接辞がつくことにより「行かせられないよ」[ik-ase-rare-nai-yo] となる。このように、子どもは語幹にいくつもの種類の接辞がついた形で、動詞のインプットを受ける。そして、インプットで得た情報の中から、それぞれの語形の使い方を理解しはじめる。

日本語の動詞の活用、形態の習得順序に関する研究には、小西（1960）、大久保（1967, 1984）、前田・前田（1996）があるが、これらは、習得順序の現象そのものを記述した研究である。岩立（1981）は、日本語の動詞の活用、形態の習得順序の一般化を

試みているが、自らいくつかの問題点を提起している。

本稿では、使用依拠アプローチ（usage-based approach, 以下、使用依拠アプローチという）の観点から、日本語の動詞の習得順序[1)]を説明したい。

使用依拠アプローチでは、言語構造は、知覚、記憶、カテゴリー化などの、より一般的な認知能力から引き出されるとし、言語に固有な生得的な構造を仮定することを最後の手段であると考える。また、言葉を話せるようになるには膨大な学習が必要だと指摘している（Langacker , 1988, 2000）。

Tomasello（1999, 2003）は、言語習得における重要なスキルには、意図理解という社会的認知能力と、パターン発見という一般的認知能力があると述べている。乳児は、視覚、聴覚においてパターンを容易に発見でき、その能力を言語記号の理解にも利用しているという。子どもは、まずはインプットを受けた言語表現や構文をひと固まりとして学び、一語文の形で産出する。その後、語と語を結合するようになり（word combination）、ピボットスキーマ（pivot schema）、アイテムベース構文（item-based construction）の順に習得が進む。

以上を踏まえて、日本語の動詞の語形の違いと習得順序にはどのような関係があるのかを明らかにすることを、本稿の目的とする。岩立（1981）による一般化の妥当性とその問題点を検証し、使用依拠アプローチの枠組みから、日本語動詞形習得順序の解明を試みる。

２．先行研究と検証項目

岩立（1981）は、1 男児の 1 才 1 ヶ月から 2 才 8 ヶ月の発話をテープレコーダで収集し、「たべる」「かく」「つくる」「かう」「こぼす」の 5 つの動詞の活用、形態の発達を分析した。その結果から、「くっつき仮説」というルールでの一般化を試みている。このルールは、初出の動詞の活用、形態は「新動詞形＝古動詞形＋形態（素）」で説明できるというものである。換言すれば、早く現れた動詞（古動詞形）にある形態素がついて新しい動詞形（新動詞形）が発話されるということである。

動詞「食べる」を例にあげると、(1) のように「タベル」が先に現れ、次に「タベル」に「ノ」がついた新動詞形「タベルノ」が現れる。そして、「タベルノ」に「ヨ」という形態素がつき「タベルノヨ」が出現する。

(1)　タベル　→　タベル<u>ノ</u>　→　タベルノ<u>ヨ</u>

上記の 5 つの動詞の資料を数量的に検討した結果、くっつき仮説を支持する箇所は 25 箇所見られ、くっつき仮説を支持しない箇所は 6 箇所と、くっつき仮説が支持された。

岩立（1981）は、新しい語形を習得する過程は、この「くっつき仮説」で説明できる

と述べているが、いくつかの問題があることも自ら指摘している。

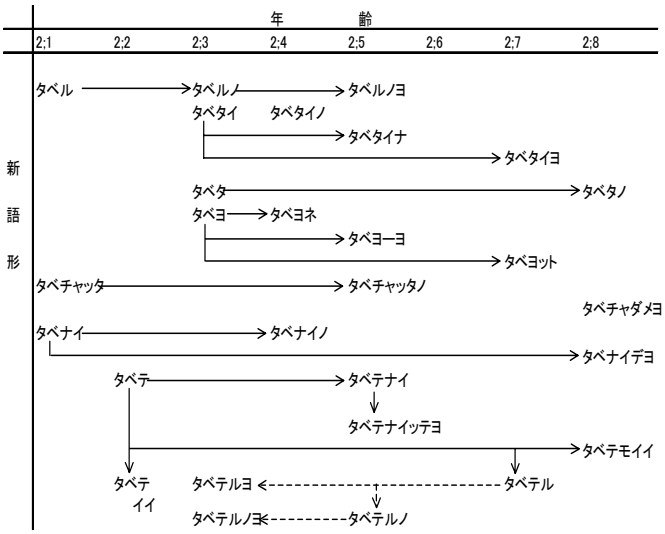

図 1　「たべる」の動詞形の変化（岩立，1981：195）

1 点目として、他の動詞間の関連が説明できないと指摘する。例えば、図 1 のように、動詞「食べる」では、2;1[2] で否定形「タベナイ」が生じているが、動詞「つくる」では 2;8 までに否定形は生じていないという。このように、動詞によって出現に違いが見られる理由が明らかになっていない。2 点目として、点線部のように、「タベテルヨ」が最初に現れ「タベテル」が後に現れるような、仮説の矛盾はなぜ生じるのかという点に関しても、岩立は、説明ができないと述べる [3]。

言語習得においては、インプットの頻度が大きく影響するという研究結果があるが（Morikawa 1997, Li and Shirai 2000）、岩立（1981）の分析では、インプットとアウトプットとの関係は分析対象外である。また、動詞形の習得順序と伝達意図との関係性からの分析は、行われていない。したがって、本稿では、「くっつき仮説（岩立 1981）」の妥当性の再検証に加えて、上記で説明した 2 点の問題を検証する。

（2）検証項目

a.　岩立（1981）による「くっつき仮説」の妥当性を再検証する。

b.　岩立のあげた問題点を解決する。

1.　動詞によって習得順序に違いが見られるが、この理由が説明できていない。

2.　仮説に矛盾する、くっついた形からそうでない形へ進む動詞形の出現が説明されていない。

（2）の検証項目について、次にあげる研究仮説を提案する。

（3）作業仮説

a. インプットが出現順位には深く関わっていると推測する。

b-1. 動詞によって、その使用目的が異なる。子どもは、伝達意図を表現するために必要な言語形式を使うので、動詞によって語形の習得順序が異なると推測する。

b-2. 子どもは、ある接辞を多用化する時期がある。その時期は、動詞と、軸となる接辞とのピボットスキーマの形成過程であると推測する。

３．研究資料と分析方法

３．１　研究資料

研究資料には、国立国語研究所による『幼児のことば資料（3）～（5）』の中から、T児の1才から3才6ヶ月までの文字化された発話の記録と母親の発話の記録を用いた[4)]。この資料は、1974年3月3日生まれの男児1名（以降T児と略称）の1才から4才までの話し言葉を採集したものである。

本資料を分析対象とした理由は次のとおりである。

（4）分析対象とした理由[5)]：

a. 自然発話データである。

b. 標準語地域に在住している。

c. ある程度の長期期間のデータが揃う。

d. 意味を有する発話の初期段階のデータがある。

e. 対象児と一番長く接する養育者との発話データであり、インプットとアウトプットの情報が得られる。

３．２　分析方法

「行く」「来る」を分析対象とするため、3.1で示した資料から、それぞれ母親と子どもの「行く」「来る」が含まれる発話を抜き出した。「行く」の発話は、T児589語、母親1221語、そして「来る」は、T児187語、母親625語であった。これを基本資料とした。

動詞形であるが、新たに接辞、およびそれに準じる文法化された形態素（以下、併せて接辞という）が新たについた形を新動詞形とし、一動詞と数える。例えば、「行く」「行くとき」「行くときも」「行かないときも」はそれぞれ一動詞とする。

「行く」「来る」を分析対象とする妥当性についてであるが、「行く」は軽動詞[6)]であり、動詞と識別できる語の中で、T児が二番目に産出した動詞である。大久保（1967）、前田・前田（1996）による研究からも、「行く」は動詞として初期に現れることが明らか

になっている。「来る」も「行く」よりは出現が遅いが、早く出現する動詞の一つとしてあげられている。また、Clark（1983, 1993）は、類似語の相違を習得するには、文脈によってお互いに対立し合い排除しあう場合、相違点が明らかになると述べる。この原理によると、「行く」の反対語と考えられる「来る」を子どもは比較しながら習得すると思われる。以上から、「行く」と「来る」を分析対象とすることは、初期の動詞形の習得状況を分析するために、妥当であると考える。

（3）で示した作業仮説を検証するために、次の 3 点を調査した。

（5）調査項目

a.「行く」「来る」の動詞形の出現状況

b. 養育者の発話頻度と、T 児の「行く」「来る」の動詞形の出現順序との関係

c. T 児の「行く」「来る」の発話と、伝達意図との関係

（5a）については、前述した岩立（1981）の分析方法を用いた。（5b）については、養育者の発話頻度と T 児の「行く」「来る」の出現順序に相関が見られるかを調べるために、ピアソンの相関係数を用いた。検定にはピアソンの r の有意性検定を行った。

（5c）は、（6）にあげる Griffiths（1979）の子どもの初期段階発話に見られる意図を基準にして分析した。

（6） Griffiths（1979）による子どもの意図 [7)]

a. requests

b. give greetings

c. make statements

d. ask questions of rudimentary kind

e. vocatives

４．結果

４．１　月齢別にみる動詞形の出現

「行く」「来る」の月齢別の動詞形と出現回数は、表 1 および表 2 のとおりである。初出の動詞形は、「行く」は終止形「イク」の形で 1;7.15 に使用が見られた。「来る」の初出動詞形は「キタ」で 2;0.15 に出現した。「行く」は、87 種類の動詞形が認められたが、「来る」は 46 種類の動詞形が出現した。その後、「行く」では、1;8.11 に「イコウ」が現れ、次いで終助詞「ノ」を伴う「イカナイノ」が 2;0.27 に現れた。「来る」では、過去形「キタ」が現れた後、終助詞を伴う「キタノ」と「コナイネ」が 2;0.27 に出現した。終止形の「クル」は、2;2.25 に現れた。

最頻の動詞形は、「行く」では連用形「イッテ」で、計 130 回、次いで「イクノ」が 70 回、「イク」が 67 回出現した。「来る」の最頻動詞形は「キタノ」で 39 回、次いで「クル」が 29 回で、連用形の「キテ」が 22 回であった。

	動詞形／年齢	初出	1;7	1;8	1;9	1;10	1;11	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	2;6	2;7	2;8	2;9	2;10	2;11	3;0	3;1	3;2	3;3	3;4	3;5	計
1	行く	1;7.15	1	1		3	4	16	1	6		5		2	2	3	1	7	1	3	2		4	2	3	67
2	行こう	1;8.11		4	5	6		10	1													1				27
3	行かないの	2;0.27						1	5	2									1			1				10
4	行くの	2;1.1							10	1	1	3	1	1	5	14	8	7	5	2	1	1	5	4	1	70
5	行ったの	2;1.15							1	2	3	4		1	9	2		3	2	1	1		1	4		34
6	行かない	2;1.15							3										2	2			1			8
7	行ったよ	2;2.2								1								1								2
8	行ける	2;2.24								1																1
9	行けない	2;2.25								1																1
10	行けないの	2;2.25								2																2
11	行ったかな	2;2.26								1						1				2						4
12	行っちゃった	2;2.26								1	1				5	4			1	1					2	15
13	行って	2;3.22									1			2	9	26	8	8	6	29	6	6	25	4		130
14	行きます	2;4.5										3	10			2						1	1			17
15	行ってらっしゃい	2;4.8										1						1					1			3

表 1　「行く」の月齢別動詞形（上位 15）[8)]

	動詞形／年齢	初出	2;0	2;1	2;2	2;3	2;4	2;5	2;6	2;7	2;8	2;9	2;10	2;11	3;0	3;1	3;2	3;3	3;4	3;5	計
1	来た	2;0.15	3		4			1	3	4			1			1		2	2		21
2	来たの	2;0.27	2	1	5	1	1	5	3	6	4	2	4	1		1			1	2	39
3	来ないね	2;0.27	2																		2
4	来たんだ	2;2.13			1																1
5	来い	2;2.24			1																1
6	来るの	2;2.24			5					1		1					1	1		1	10
7	来て	2;2.24			5		1		2			1	2					4	7		22
8	来る	2;2.25			2			8	1	2	1	1	3	2		1	1	5		2	29
9	来たら	2;2.26			1									1		1					3
10	来てた	2;2.26			2											1					3
11	来れなく	2;4.8					1														1
12	来れなくて	2;4.8					1														1
13	来なかったね	2;6.0							4												4
14	来たよ	2;6.0							3		1										4
15	来ましょう	2;6.0							1		1										2

表 2　「来る」の月齢別動詞形（上位 15）

４．２　養育者の「行く」「来る」の使用頻度との関わり

４．２．１　インプットの頻度と出現順位

母親の使用頻度と T 児の動詞形の出現順位を示したものが表 3 である。

分析の結果、「行く」のインプット量と T 児の動詞形の出現順位には、相関が認められなかった。「来る」では、$r=0.46, P, < .05$ と、母親のインプット量と T 児の動詞形の出現順序との間に若干の相関が見られた。

動詞形	頻度 母親	出現順位 T児	動詞形	頻度 母親	出現順位 T児
行く	36	1	来た	10	1
行こう	3	2	来たの	29	2
行かないの	24	3	来ないね	2	3
行くの	158	4	来たんだ	0	4
行ったの	87	5	来い	0	5
行かない	5	6	来るの	7	6
行ったよ	1	7	来て	11	7
行ける	0	8	来る	29	8
行けない	0	9	来たら	1	9
行けないの	1	10	来てた	5	10
行ったかな	3	11	来れなくて	0	11
行っちゃった	7	12	来なかったね	0	12
行って	35	13	来たよ	0	13
行きます	2	14	来ましょう	0	14
行ってらっしゃい	7	15	来るからね	0	15
行きましょう	64	16	来ますよ	2	16
行ったね	0	17	来てない	2	17
行った	27	18	来てって	0	18
行け	0	19	来たでしょう	2	19
行くんでしょう	4	20	来るよ	0	20

表 3　養育者の「行く」「来る」の発話頻度と出現順位（上位 20 位）

具体的な発話を見てみよう。「行く」では、母親が「イクノ」を 158／1221 回使用するなど、最も使用頻度が高かったが、T 児の発話には、「イク」が一番先に出現し、「イクノ」は 4 番目に出現した。T 児が一番早く産出した「イク」は、母親の使用頻度は 36／1221 回であった。T 児が「イク」を初めて産出する前に、母親の「イク」の発話が多く見られたことが、この要因かとも思われるので、T 児の「イク」の初出前に、母親が「イク」をどれくらい使用したかを調べたが、母親の発話に「イク」は一度も現れていなかった。「来る」では、母親は、終助詞をつけた「キタノ」を「キタ」より多く発話しているが、T 児は、「キタ」のほうを早く産出した。

４．２．２　養育者の使用頻度と T 児のアウトプット量

次に、養育者の「行く」と「来る」の使用頻度と T 児の「行く」「来る」のアウトプット量との関わりについて調査した結果が、表 4 である。

母親の使用頻度上位 30 の動詞形と、T 児の使用頻度との間に相関が見られるかを調べた。「行く」は、$r=0.55$, $P<.01$ で、「来る」は、$r=0.68$, $P<.01$ となり、「行く」「来る」ともに相関が見られた。このことから、全体の使用頻度からは、養育者の使用頻度が高ければ子どものアウトプット量も多くなっているといえる。

動詞形	頻度		動詞形	頻度	
	母親	T児		母親	T児
行く	36	67	来た	10	21
行こう	0	27	来たの	29	39
行かないの	24	10	来ないね	2	2
行くの	158	70	来たんだ	0	1
行ったの	87	34	来い	0	1
行かない	5	8	来るの	7	10
行ったよ	1	2	来て	11	22
行ける	0	1	来る	29	2
行けない	0	1	来たら	1	3
行けないの	1	2	来てた	5	3
行ったかな	3	4	来れなくて	0	1
行っちゃった	7	15	来なかったね	0	4
行って	35	130	来たよ	0	4
行きます	2	17	来ましょう	0	2
行ってらっしゃい	7	3	来るからね	0	6
行きましょう	65	7	来ますよ	2	1
行ったね	0	4	来てない	2	1
行った	27	19	来てって	0	1
行け	0	15	来たでしょう	2	1
行くんでしょう	4	6	来るよ	0	2
行ってね	3	4	来たところ	0	1
行ってみたいな	0	2	来るでしょう	2	1
行ったのね	3	1	来なきゃ	0	1
行っちゃったね	0	1	来なきゃね	0	1
行っちゃったの	1	5	来るね	0	4
行くのよ	18	5	来てる（来ている）	3	1
行ってるとき	1	1	来るときも	2	1
行ってるの	5	4	来たのかな	2	1
行っちゃうから	0	2	来ようか	2	1
行っちゃう	0	2	来ましたよ	2	2

表 4　母親と T 児の使用頻度の比較

４．３　新動詞形の習得過程

新しい動詞形の習得方法は、岩立（1981）と同様に、大別して次の 3 通りであった。

（7）新動詞形の習得

a. 新語形が単体で出現

行く　20 種/87 種　　来る　13 種/46 種

b. 古動詞形に接辞がつき、新動詞形が出現

行く　59 種/87 種　　来る　28 種/46 種

c. 接辞がついた動詞形から、ついていない動詞形が出現

行く　8 種/87 種　　来る　5 種/46 種

（7a）は、つながりのない新しい動詞形を覚える習得方法である。「行く」は、全 87 種類の動詞形中、20 種類が新語形として単体で出現したことを意味する。図 2、3 に示されているように、「イク」「キタ」は「行く」「来る」の最初に産出された動詞形である。直線のつながりがない「イコウ」「イッタノ」や「コナイネ」「コイ」なども見られた。

（7b）は、新語形にある要素がくっついて新しい動詞形が出現するものである。「イク

ノ」「イクノヨ」、「キタラ」「キタラネ」などがその例である。「行く」では、「イク」が 1;7 に生じ、5 ヶ月後の 2;1 に「イク」に「ノ」がついた「イクノ」が生じた。そして「イクノ」に「ヨ」がついた「イクノヨ」が、2;7 に出現した。

（7c）は、ある要素がくっついた語形が先に出現し、その後、その要素がついていない語形が出現するものである。「行く」では、「イッタノ」が「イッタ」より前に現れ、「来る」では、「コナイネ」が「コナイ」よりも先に現れている。

「くっつき仮説」を支持しない（7c）よりも、「くっつき仮説」を支持する（7b）の数が、大きく上回った。「行く」「来る」の動詞形の習得では、岩立（1981）のくっつき仮説を支持する結果であった。

（7c）で述べた仮説に反する箇所について詳しく見てみると、「行く」では、3/6 箇所において、終助詞「ノ」がついた形が先に現れ、終助詞なしの動詞形が後に現れていた。「イッタノ→イッタ」「イカナイノ→イカナイ」「イッテルノ→イッテル」がそれである。「来る」では、終助詞「ネ」を伴う形が先に現れ、後から終助詞のつかない動詞形が現れた箇所が、3/5 箇所見られた。「コナイネ→コナイ」「クルカラネ→クルカラ」「キマスカラネ→キマス」が、接辞つきから接辞なしの順に現れたものである。

その他に、「ショウ」の使用に関しても、「イッタデショウ」「イッタンデショウ」が 2;9 に、「クルデショウ」が 2;10 に現れるなど、同様の時期に、複数の箇所で使用されていた。

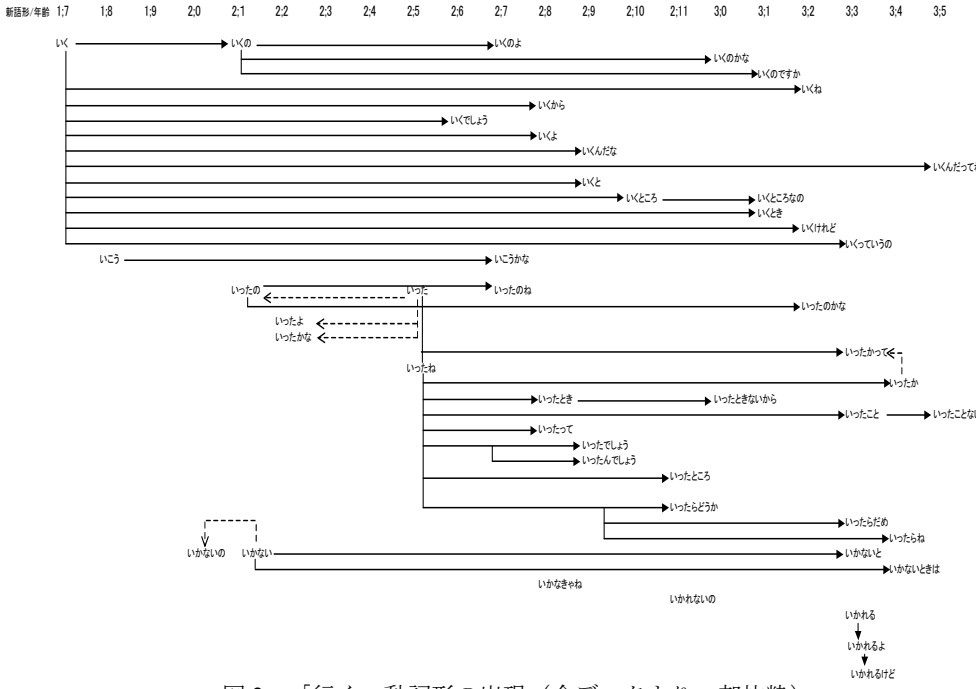

図 2　「行く」動詞形の出現（全データより一部抜粋）

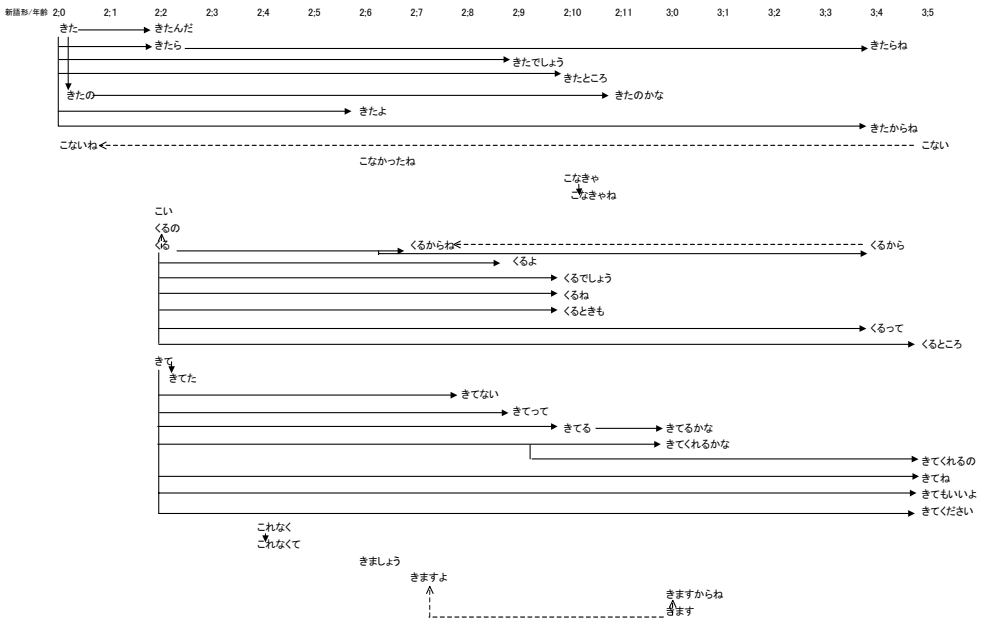

図 3　「来る」動詞形の出現（全データより一部抜粋）

４．４　伝達意図から見る動詞形の習得過程

Griffiths（1979）による子どもが表す意図の 4 種類が、「行く」「来る」別に占める割合を調査した結果を示す。

４．４．１　「行く」の伝達意図

「行く」の出現初期段階の動詞別、伝達意図の割合は、図 4 のとおりである。初出から 2;1 までは、request を意図する発話が続いている。2;1 に statement と question が現れてからは、その月を境に、その他の意図が占める割合が増えていった。

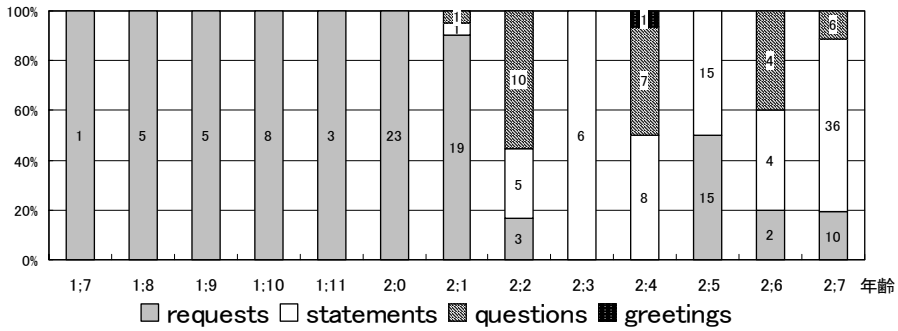

図 4　T 児の伝達意図の割合「行く」

（8）は、request を意図する初出の発話で 1;7.15 に出現した。「イク」は、「眠りたい」

もしくは「眠りに行きたい」という request を意図する発話である。他にも request を意図する動詞形は、「イク」「イコウ」「イクノ」などがある。2;1 までは、request を意図する発話のみの出現が続く。

(8)（T 児 1;7.15）
母親：ねんねするの？
T 児：<u>イクー</u>（以下、ダイアログ中の下線はすべて筆者による）

(9) は、statement の初出発話で 2;1.15 に現れた。母親と T 児がおもちゃで遊んでいる場面である。おもちゃの自動車が行ってしまったということを陳述している発話である。statement を意図する発話の動詞形には、「イッタノ」「イクノ」「イキマス」などがある。2;1 には、一発話のみであったが、その後 statement の発話数が増えていく。

(9)（T 児 2;1.15）
母親：それでピッピッピってバックしてるの。そう。
T 児：<u>イッタノ</u>。

(10) は、「行く」の question を意図する初出場面である。2;2.10 に、朝食の場面で使用された。否定疑問文の形で現れている。question を意図する発話の動詞形は、「イカナイノ」「イッタカナ」「イッタノ」などである。この月に、question を意図する発話が一発話のみ見られ、その後、question の発話数が増えていく。

(10)（T 児 2;1.20）
T 児：アシャ　ガッコウニ　<u>イカナイノ</u>？

４．４．２　「来る」の伝達意図

「来る」の出現初期段階の動詞別、伝達意図の割合は、図 5 のとおりである。

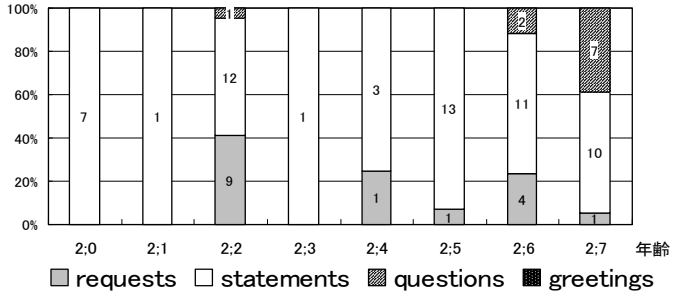

図 5　T 児の伝達意図の割合「来る」

「来る」では、「行く」とは異なり、statement を意図する発話が最初に現れた。2;5 までは、statement での「来る」が多く使用されているが、徐々に request と question を意図する発話が増えている。しかし、statement の発話が依然として 5 割以上を占めている。

（11）は、statement の初出発話である。2;0.15 に出現した。2;5 までは、statement を意味する「来る」が多い。statement 発話の語形は、「キタ」「コナイ」「キタノ」などである。

（11）（T 児 2;0.15）

T 児：キタ

母親：そう、お魚屋さんもう来たわ。

request を意図する発話は、2;2.24 に出現した。（12）は、「コイ」「クルノ」「キテ」という語形で、家にいない父親に対して、「帰って来て」という request を表している。request を意図する発話の語形には、「コイ」「クルノ」「キテ」などがある。

（12）（T 児 2;2.24）

T 児：オトーシャン、オトーシャン　コイ。オトシャン　オトシャン。オトシャンモ　クルノ。キテ。

（13）は、question の初出発話である。2;5.10 に現れた。八百屋が来るかどうか、母親に質問している。question を意図する発話の語形には、「クル」「キタ」「キタノ」などがある。

（13）（T 児 2;5.10）

T 児：キョー　ヤオヤ　クールー？

母親：今日は来ない。

５．考察

５．１　インプットとくっつき仮説

分析結果からは、養育者の発話頻度と動詞形の出現順序との間には相関が見られなかった。よって、インプット量は動詞形の出現順序の決定要因ではないといえる。

このことから、動詞形習得の極初期段階では、子どもはインプット量に影響を多く受けるのではなく、簡単な動詞形から徐々に接辞が足された動詞形を学ぶという習得順序であると考えられる。

接辞がない動詞形が先に現れ、接辞がつく動詞形は後から現れる数が多かった結果を

鑑みると、子どもは、インプットを受けた動詞形の中から、自ら動詞形に共通するコアの部分を見つけ出していく能力があると推測できる。Tomasello（1999, 2003）が指摘するように、パターンを発見する一般認知能力によって、コア部分を導き出すことができると考えられる。

そのことの裏付けとなる子どもの助詞の使用率を図 6 に示す。養育者は、通常、助詞のついた文を使うので、助詞つきの文がインプットとして入るはずだが、習得初期の段階では、子どもは助詞なしの文を多く使用していることがわかる。子どもは、インプット情報の中から、共通するコアの部分を見つけ出していく能力があることの一つの裏付けであるといえる。

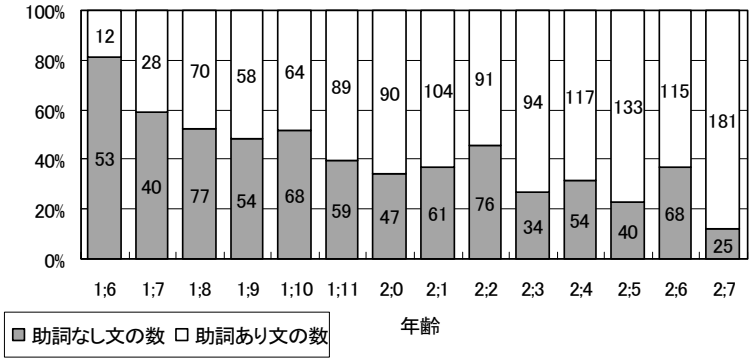

図 6　子どもの助詞の使用率（1;6~2;7）（データ出典は、大久保（1967）による）[9)]

５．２　他の動詞との関係

では、動詞間の関連はどう説明できるだろうか。岩立（1981）では、動詞によって、習得される語形の順序が異なる理由を説明できなかったが、分析の結果から、動詞によって語形の現れる時期が異なる理由には、子どものその語形に対する必要性が関係すると考えられる。

4.4 で述べたとおり、「行く」は、「イク」「イコウ」などの形で、request を意味する発話が早く現れている。それに対して、「来る」は、「キタ」「コナイネ」「キタンダ」という statement での使用が先に出現している。「行く」「来る」の習得初期には、伝達意図の割合にも偏りが見られる。習得初期の「行く」は request から、「来る」は statement からというように、伝達意図が異なっている。この伝達意図の差違が、動詞によって、語形の習得順序に差が生じる一つ要因であると考える。

この時期の子どもは、まずは自己の移動欲求が強い（Piaget 1937）。前田・前田（1996）の研究でも、この傾向が見られる。「行く」は、「自分が移動したい」という欲求の意図を伝える必要があるため、動詞の中でも早く現れる。つまり、この必要性の高さから、request を意図する言語形式「イク」「イコウ」などの語形が最初に現れるのである。

それに比べて、「来る」は、「他者（物）の自分のいる場所までの移動」を主として意味するため、この時期の子どもには、request を意図する「来る」の必要性が低いと思われる。よって、他者に移動を促すよりも、養育者の注意を引くために、「キタ」「コナイネ」のように statement を意図する発話が多く見られるのである。

５．３　くっつき仮説の反例：形態素が付加した語形から付加していない語形の出現

岩立（1981）の指摘どおり、本研究においても、くっつき仮説にそぐわない、接辞がついた語形からついていない語形が出現した。この反例は、くっつき仮説を否定するものではないが、どうしてこのような事例が見られるかについて説明していきたい。

T 児の発話における動詞全体の終助詞「ノ」のタイプ頻度を見ると、終助詞「ノ」の使用は 1;11 ぐらいから始まっている。1;11 には「ナイノ」が現れ、2;0 には「キタノ」「イラナイノ」「イカナイノ」「バイバイシタノ」、2;1 には「トッタノ」「イクノ」「タベルノ」「ノルノ」など、一定の時期に、非常に多くの「ノ」が使用されている。「イクノ」「イッタノ」「イカナイノ」も 2;0 から 2;1 の間に産出が見られ、この時期に多くのタイプが出現している。「ノ」の多様期であるといえる。終助詞「ネ」や「ヨ」、「ショウ」からも同様の結果が見られた。

以上の事例から、次のことが考えられる。

ある接辞が多く出現する以前から、T 児はこの接辞を伴う動詞形を耳にしてきたわけだが、この時期になり、これらの接辞を動詞に付加できると認識しはじめた。そして、様々な動詞に、その接辞を付加しはじめたと考えられる。

データ上では、母親の「イッタノ」の発話はゼロであった[10]のに、T 児は「イッタノ」を産出している。しかも「イッタノ」が先に現れて「イッタ」が後に現れたということは、「イッタ」という動詞形は「イッタノ」が出現する以前に習得済みであり、それにピボットスキーマを使って、T 児が「イッタノ」を産出したとも考えられる。

終助詞「ノ」を例にとると、2 才ぐらいから、子どもの中で終助詞「ノ」のパターン化がはじまり、ピボットスキーマ的なアウトプットが始まったと推測できる。すなわち、図 7 のように、助詞「ノ」を軸とするピボットスキーマが形成され、スロットに動詞形を入れるスキーマが形成されたため、くっつき仮説の反例と見られるような現象が現れたと説明できる。

SLOT	PIVOT
＋	ノ

図 7　動詞形をスロットとする助詞「ノ」のピボットスキーマ

これらを鑑みると、日本語の動詞形の習得には、ある特有の順序が見られることが示

唆される。Tomasello（2003）は、ホロフレーズ、いわゆるチャンクをなす一語文から、二語文（語結合→ピボットスキーマ）と習得が進んでいくと述べる。しかし、大久保（1984）は、日本語は図 8 のように、二語文に進む前に、一語に助詞がついた構文が出現すると指摘する。

構文の型	大体の初出年齢
一語文	1歳前後
↓	↓
一語＋助詞	1歳半前後
↓	↓
二語文	1歳半頃から10ヶ月前後
↓	↓
三語文・多語文	2歳前後
↓	↓
複文	2歳半前後

図 8　大久保（1984）による構文の型と初出年齢

Tomasello（2003）との違いは、図 9 のように、日本語の動詞形では、「オンモ　イク」のような二語文が現れる前、もしくはほぼ同時期に、「イクノ」のように、一語に助詞がついた形式でのピボットスキーマが形成されるという点である。日本語は、二語文が現れる前に、一語に接尾辞がついた動詞形が現れる。最初は、動詞＋接尾辞の形をチャンクとして固まりで学習し、その結合がパターン化され、動詞と接尾辞のピボットスキーマを作るようになる。その後、二語文が現れる。

構文の型	例
一語文（接尾辞の結合なし）	「クル」
↓	
一語文（一語＋接尾辞）	「クル＋ノ」のチャンク
↓	
一語文（一語＋接尾辞のピボットスキーマ化）	「動詞形のスロット　＋ノ」
↓	
二語文（語結合）	「パパ＋クル」の結合
↓	
二語文（ピボットスキーマ化）	「名詞のスロット　＋クル」
↓	
三語文・多語文	
↓	
複文	

図 9　日本語の構文の習得

例を示すと、T 児の「行く」の習得では、「イク」が 1;7 に最初に現れた。それが、接辞の結合なしの一語文である。その後、2;1 になり、「イクノ」が出現している。他の動詞形での「ノ」の使用状況から、2;1 の時期には、「ノ」を軸としたピボットスキーマが形成されていると思われる。

６．結論

本稿では、（14a）にあげる「くっつき仮説」の妥当性と、（14b,c）の問題を使用依拠アプローチの枠組みから検証することによって、子どもの動詞形の習得順序を解明することを試みた。

（14）　a.　岩立（1981）による「くっつき仮説」と子どもの受けるインプットの頻度は、どちらが支持されるか。

b.　動詞によって習得順序に違いが見られるが、この理由が説明できない。

c.　「くっつき仮説」に矛盾する、くっついた語形からくっつかない語形へ進むという反方向的な動詞形の出現が説明できていない。

その結果、インプットの頻度は、習得に結びつく決定要因ではないということが明らかになった。そして、子どもは、インプットを受けた動詞形の中から、自ら動詞形に共通するコアの部分を見つけ出していく能力があることが示唆された。加えて、動詞形の習得は、必要性が関係するということも示唆された。伝達意図に即した動詞形が、必要時に使用されるため、そうでない動詞形は現れない。すなわち、使用に基づいて動詞形が習得されていくといえる。

最後に、くっつき仮説に矛盾する順序の動詞形の出現事例であるが、これは、動詞形習得は、ある接辞を軸とするピボットスキーマが形成され、スロットに動詞形を入れるというスキーマが形成されたため、このような現象がおこると説明できる。このような反例は、個別の動詞を分析対象としているくっつき説では、説明しきれない。ピボットスキーマという概念を用いた方が、説明がつくであろう。このように日本語の動詞形の習得には、ある特有の順序が見られることが示唆されたが、Tomasello（1999, 2003）との違いは、日本語の動詞形では、二語文が現れる前に、語形成でのピボットスキーマが形成されるという点である。

以上、動詞形の習得を使用依拠アプローチという実際の言語使用を考慮する枠組みを用いることによって、日本語動詞形の習得に、新たな考察を加えた。

しかしながら、動詞形の習得順序の一般化を唱えるのは、まだ性急であろう。岩立（1981）の使用したデータも今回のデータも、一男児のデータを使用しての分析結果である。また、分析対象の動詞数が少ない。ピボットスキーマに関しても、データが不十分であったため、今後、研究を重ねていきたい。

註

本稿は、第 21 回社会言語科学会大会（2008 年 3 月 22 日東京女子大学）での口頭発表を改訂したものである。

1） 本稿での「習得順序」とは、産出の順序を示すこととする。
2） 年齢は次のように示す。年；月．日　2;1 は、2 才 1 ヶ月を意味する。
3） 岩立（1981）は、仮説に反する事例の理由を探りたいと述べている。「くっつき仮説」は、「傾向」があることを示す仮説であるため、ここであげた反例はが仮説を否定するものではないことを述べておきたい。
4） 産出が見られないからといって、習得していないとはいえないが、理解度を示すデータを多く確保することは困難であるので、ここでは発話記録をデータとして使用する。
5） 日本人の言語習得資料としては、CHILDES によるものが有名であるが、現在使用可能な CHILDES からのデータは、対象児の所在地、会話の相手、対象者の年齢などが本研究には適さないという理由から使用しなかった。
6） Clark（1978）は go, put, get, do, make, sit は他の動詞に比べて頻繁に用いられると述べ、どの言語においてもわずかな意味要素から構成されているこれらの動詞を軽動詞（light verb）とした。軽動詞は、最も早く習得され最も頻繁に使用される動詞であり、初期段階の動詞形の習得順序を分析するのに適していると考える。
7） この時期の子どもは、まだ自分では移動ができないため、「行きたい」などの願望は、requests に含めている。Griffiths（1979）は、vocatives をあげているが、本データには vocatives は見られなかった。
8） 表 1,2 については、初出日が同じ場合は、列が上のものほど早く現れた動詞形である。
9） ここでの助詞とは、終助詞、格助詞、接続助詞、係助詞である。
10） 実際には、「イッタノ」を一度も聞いたことがないとは考えにくいが、データ上でゼロということは、実際にもそれほど多くインプットを受けたわけではないと推測する。

参考文献

Brown, R. (1973) *A First Language: The Early Stages*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Clark, Eve V. (1978) Discovering What Word Can Do. *CLS* 14, pp.34-57.

_____. (1983) Meaning and Concepts. In J.H. Flavell & E. Markman, eds., *Cognitive Development*. New York: John Wiley.

_____. (1993) *The Lexicon in Acquisition*. Cambridge: Cambridge University Press.

Griffiths P. (1979) Speech act and early sentences. In P. Fletcher and M. Garman, eds., *Language Acquisition: Studies in First Language Development.* Cambridge: Cambridge University Press.

岩立志津夫（1981）「一日本語児の動詞形の発達について」『研究年報学習院文学部』vol.27. pp.191-205.

国立国語研究所（1982,1983）『幼児のことば資料（3）（4）（5）』東京：秀英出版

小西輝夫（1960）「幼児の言語発達」『児童精神医学とその近接領域』No.1. pp.62-74

Langacker, Ronald W. (1988) A usage-based model. In Brygida Rudzka- Ostyn, eds., *Topics in Cognitive Linguistics*: *Current Issues in Linguistic Theory 50*, pp. 127-161. Amsterdam: Benjamins.

_____.（2000）坪井栄治郎訳「動的使用依拠モデル」坂原茂編『認知言語学の発展』東京：ひつじ書房

Li, P., & Shirai, Y. (2000) *The Acquisition of Lexical and Grammatical Aspect*. New York: Mouton de Gruyter.

前田富祺・前田紀代子（1996）『幼児語彙の統合的発達の研究』東京：武蔵野書院.
Morikawa, H. (1997) *Acquisition of Case Marking and Argument Structures in Japanese*. Tokyo: Kuroshio
大久保愛（1967）『幼児言語の発達』東京：東京堂出版.
_____.（1984）『幼児言語の研究－構文と語彙－』東京：あゆみ出版
Piaget, J. (1937) *The Construction of Reality in the Child*. New York: Basic Books.
Tomasello, M. (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
_____. (2003) *Constructing a Language.* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.